

IAQG リスボン会議について

1. はじめに

IAQG (International Aerospace Quality Group) リスボン会議が、2026 年 4 月 20 日 (月) ~23 日 (木) にポルトガルの首都リスボンにて開催された。これに先立ち、9100 規格関連の会議は 4 月 16 日 (木) から始まっており、日本からも担当メンバーが参加した。

全体で 200 名ほどが現地参加した中で、JAQG (Japanese Aerospace Quality Group) から数多くのメンバーが対面およびオンラインで会議に参加した。

今回の会議場は Pestana Palace Lisboa という、20 世紀初頭に建築された宮殿様式の住居をホテルとして改装したもので、重厚な造りの建物であった。



会議会場 (Pestana Palace Lisboa)

9100 規格は、主に米国ステークホルダーの要請に応じて 9001 の改定を待たずに部分的な改定を行う計画であったが、本年秋に予定されている ISO9001 の改定に追随する形で 2027 年 1 月の改定を行う計画となった。今回の会議では 9100 やそれに付随する各種規格について、改定内容や日程について再確認が行われた。

なお、今回は会議場レイアウトの関係上、各委員会のメンバー写真があまり撮れておらず、いつもより参加者の写真が少ないが、ご容赦頂きたい。以下に会議について報告する。

2. IAQG の概要および会議概要

国際航空宇宙品質グループ (IAQG) は、世界の航空宇宙及び防衛関連企業が互いの信頼に基づいて強力な協力体制を構築・維持することにより、価値創造の流れの全段階において品質の著しい改善とコストの削減を実現する活動を推進するために 1998 年に設立された民間非営利組織である。その構成は、アメリカ地区の IAQG-America、アジア太平洋地区の IAQG Asia-Pacific、ヨーロッパ地区の IAQG-Europe から構成される。

いずれの組織も契約請負業者以外には常勤専従職員はおらず、航空宇宙関連企業の従業員により構成されており、各企業のボランティア活動により支えられている。

JAQG は IAQG Asia-Pacific の主たるメンバーであり、航空宇宙における品質マネジメントの最新状況を把握するとともに、日本の航空宇宙産業界の意見を国際品質規格や国際航空宇宙認証制度に反映させるべく活動を行っている。SJAC は JAQG 事務局として主に日本国内の活動を支援するとともに、IAQG においても各種委員を担うなど、国内外で活動支援を行っている。

IAQG の主な活動目的は次の 3 点である。

- ・ 航空宇宙業界独自規格 (9100 シリーズ規格) の制定及び維持
- ・ 品質改善のためのガイダンス資料の提供
- ・ 9100 シリーズ認証制度の開発及び維持

会議は通常、各種分科会から始まり、IAQG プレジデント及び各セクターのリーダーによる執行委員会 (Executive Committee)、Voting Member (以下、投票メンバー) が参加する Operations Council (今回は主催者都合によりキャンセル) と続き、最終日に IAQG 総会 (General Assembly) が行われ、中長期戦略の検討及び作業進捗状況の確認・調整等が行われる。これらについては後述する。

IAQG 全体で 27 社の投票メンバーのうち、JAQG は 4 社のメンバーを有し、ほぼ全ての会議へ積極的に参画しており、我が国及びアジア太平洋地区の代表としての意見を IAQG に提案及び反映する活動を行っている。

以下、実際の時系列とは異なるが、理解しやすさを第一義として、まず総会の概要について述べ、続いて各種分科会について述べる。

(1) 総会 (General Assembly)

(報告者：城福隆司 日本航空宇宙工業会)

総会は、最終日の午前に開催された。IAQG プレジデントによる執行委員会報告に始まり、各セクター (Americas、Europe、Asia-Pacific) のリーダーからの活動報告、規格の開発状況、SCMH (Supply Chain Management Handbook) および AIMM (Aerospace Industry Maturity Model) 等のユーザー支援ツールの開発状況報告、COT (Certification Oversight Team) 活動報告、IAQG による認証制度の IT 基盤である OASIS (Online Aerospace Supplier Information System) の更新状況の報告などが行われた。

執行委員会報告では IAQG プレジデント Eric Jefferies 氏より、色々と課題はあるものの、先が見えてきており、楽観的見通しをしていることと、IAQG としての AI ツールが整備されてきていることが報告された。

続くセクター報告では、各セクターリーダーより、メンバーの加入状況、活動報告がなされた。Asia-Pacific からは、本会議よりセクターリーダーを務める (株) IHI の陶山氏より報告がなされた。

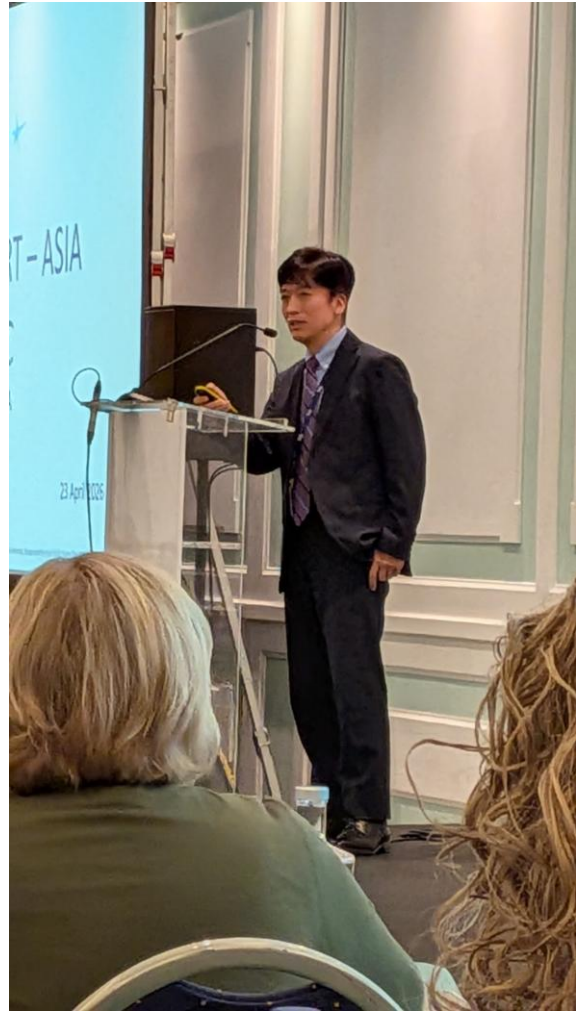
特徴的だったのはメンバー構成で、Americas では投票権を有する Full Member が 10 社、セクター内での投票権を有する Associate Member が 9 社、その他 Affiliate Member が 3 社と、Full Member 以外の構成が非常に少ないのに対し、Europe や Asia-Pacific では Affiliate Member が多数在籍しており、現状ではセクター間のメンバーステータスに対する考え方に差異があることが見て取れた。本件は IAQG でも課題としており、メンバーステータスの統一化を図ろうとしている所である。



総会 (General Assembly) の様子



Eric Jefferies 会長



陶山セクターリーダー

総会の決議事項は下記の 3 件で、いずれも 27 名の投票メンバー（Americas:10 名、Europe:10 名、Asia-Pacific:7 名）により承認された。

1. 2025 年 10 月のワシントン D.C 会議議事録の承認
2. 2025 年 IAQG 会計の承認
3. IAQG Executive Committee メンバー交代（Asia-Pacific リーダーの交代に伴う）の承認

なお、投票メンバーのうち、4 名（株式会社 I H I、三菱重工業㈱、川崎重工業㈱、㈱ S U B A R U）は JAQG から出席している。

（2） 執行委員会（Executive Committee）

（報告者：陶山修二 ㈱ I H I）

執行委員会は、IAQG 会長、各セクターリーダー、財務管理チームリーダー等から構成され、IAQG の組織運営に関連する重要事項を討議する委員会である。毎週オンライン会議方式にて実施されているが、リスボン会議では対面にて実施された。

今回は、下記の 4 点について確認・議論した。

- ① 2025 年 IAQG 財務決算内容及び 2026 年 IAQG 予算
- ② IAQG スカラーシップ構想
- ③ IT 開発・デジタル化の実施状況（AI 活用構想、OASIS 及び OASIS Insight のアップデート状況、OASIS データの Reporting Server 及び BI ツールの構築状況）
- ④ Single SDO (Standards Development Organization) 化をめぐる協議調整状況（SAE との関係、著作権、

(3) IAQG Operations Council

主催者都合により本会議はキャンセルされた。

(4) Standard Council Meeting

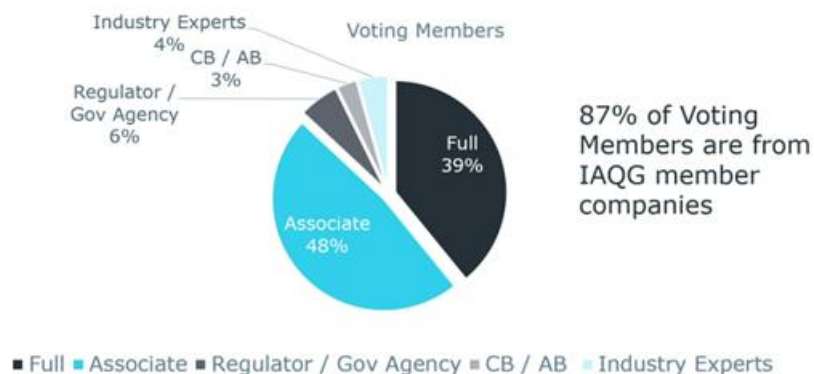
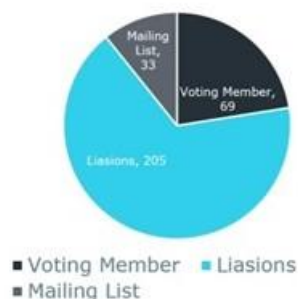
(報告者：渡辺 秀 三菱重工業㈱)

IAQG Standards Council Meetingは各セクター代表の投票メンバー27名の参加により運営され、各Standardsの全体的な健全性とパフォーマンスの管理、IAQG AISEL IPポリシー（AISEL: Association Internationale Sans but Lucratif:国際非営利団体）への整合、航空宇宙産業の技術的な向上、各Standards開発と保守に関するプロセスとツールの管理及び承認に責任を持っている。

今回は、以下のような議題に対して、報告及び議論が行われた。

- ・ 各Standardsのステータス/投票状況
- ・ Standardsの各国語(ドイツ語、フランス語、スペイン語、イタリア語、日本語、韓国語、中国語)への翻訳状況の説明
 - イタリア語及びドイツ語に関しては、翻訳レビュー機関との契約完了。
 - 日本語、韓国語に関しては、翻訳レビュー機関との契約締結直前。
 - 残る3か国の翻訳レビュー機関との調整を進め、SDO発行に向け進める。
- ・ OCAP*適用の提案
- ・ IAQG-1 Standards Management Committeeの状況報告
 - 構成メンバーの紹介が行われた。

IAQG -1 Standard Management Committee



円グラフで示す通り、307名のメンバーの内、69名が投票権を持ち、投票権保持者は3セクター（北米、欧州、アジア太平洋）にほぼ同等に分散し、87%がIAQGメンバーで構成されている。

*OCAP: Organization Certification Analysis Process。組織と認証機関 (CB) との間で、組織のAQMS (航空宇宙品質マネジメントシステム) の適用範囲および関連する認証審査プログラムを決定し、スキーム内での認証に関するリスク評価を実施するための対話的なプロセス。本要求はIA9104-1 Requirements for Certification of Aviation, Space, and Defense Quality Management Systemsに規定されているが、国内ではまだ発行/適用されていない。

(5) IAQG-1 Standards Management Committee

(報告者: 上原美基 川崎重工業㈱)

SMC (Standards Management Committee:規格管理委員会) は、作成や管理など規格に係る技術的作業を担当する部門であり、議長と各セクター担当からなるリーダーシップチーム、各規格の執筆チーム、投票権メンバー (Full及びAssociate Memberとステークホルダーなど専門家) から構成される。

今回のリスボン会議では、まず2025年活動の全般報告として、各セクターでの規格に関わる活動、各規格の投票率 (90%超) について報告が行われた。また、会議事務局であるSAE InternationalからStandards Works (SAEが提供するプラットフォーム) の機能向上、SAEが参加する規格デジタル化推進団体 (Digital Standards Alliance) の説明、SAE新会議体S-20 Aerospace Council及びS-18 Safety Management System発足の報告があった。

その後、各規格の改訂状況が報告された。現在進行中のOCAP (Organization Certification Analysis Process: 認証機関における組織認証分析プロセス (9104/1規格要求)) 要求の追記改訂では、4Gr中、2nd Grまで投票が完了し、賛成多数で可決しStandards Councilへ送付されたこと、否認票へのコメント処置結果を各コメント者に回答中であること、3rd GrはまもなくSMC投票予定であることが報告された。

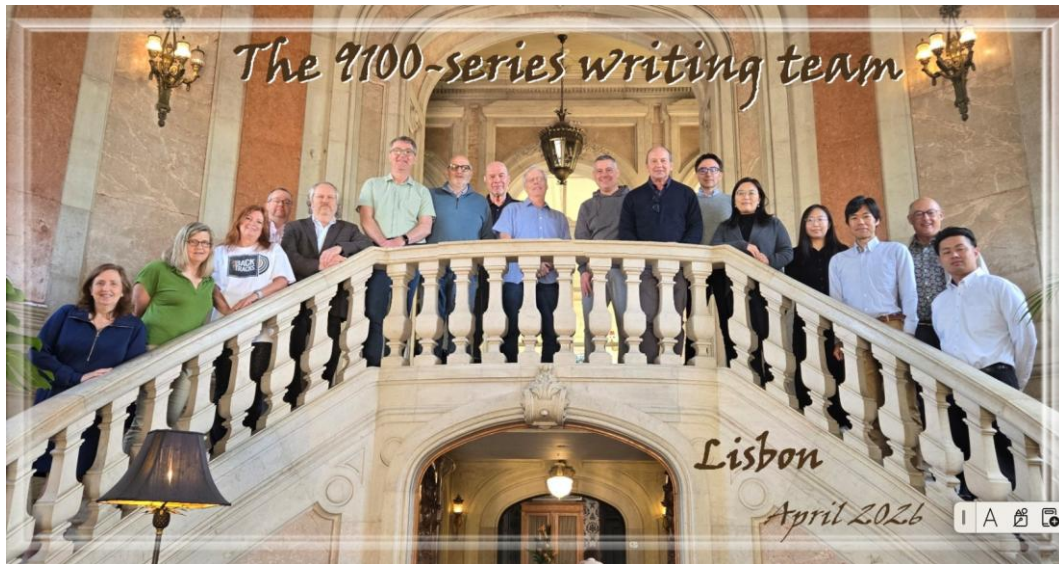
a 9100規格「航空、宇宙及び防衛分野の組織に対する要求事項」

(報告者: 西口 潤 三菱重工業㈱)

IAQG9100チームでは2つの9100規格の改正 (①部分改正、②本改正) を進めてきたが、①部分改正については、ISO9001:2026版が発行間近であり、組織及び認証機関にとって短い期間に2回の移行を実施するのは負担がかかる等の理由から、キャンセルすると発表された。部分改正で変更/追加した、主にsub-tier (下請) 管理を強化した要求事項は、②本改正に反映される。

本改正では、上記の他、航空宇宙独自分野として、情報セキュリティに関する要求事項を新規追加、製品安全、模倣品の防止、APQP (Advanced Product Quality Planning)、内部監査、是正対策、納期通りの引渡しに関する要求事項等を強化、及びISO9001:2026版の要求事項を反映している。2026年2月から3月にかけて、IA9100規格案に対する投票が実施され、60票中、承認は59票であり、無事投票を通過した。今回の投票で193件のコメントが寄せられ、IAQGリスボン会議前に各セクター (米/欧/亜) チームでコメントに対する処置案を検討、今回のIAQGリスボン会議では各セクターでの協議結果を基に、IAQG9100チームとしての最終方針を協議し、チーム全体で合意したことが報告された。

今後、ISO9001:2026版発行 (26年9月頃) 後、IA9100規格に対する最終投票が実施され、27年1月にIA9100規格完成を目指している。



9100チーム集合写真

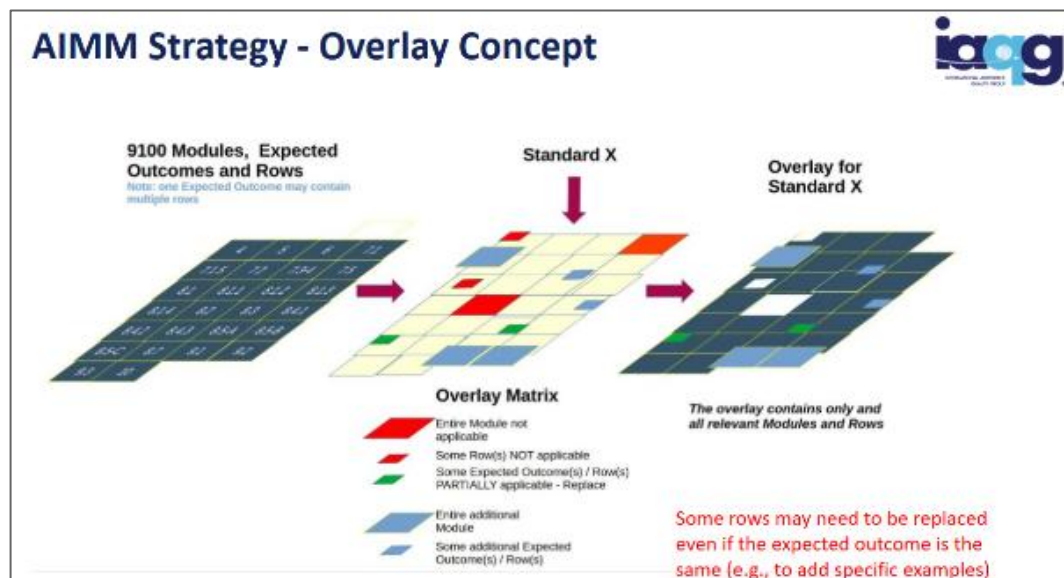
西口氏（右端から3番目：三菱重工(株)）、田中氏（右端：川崎重工(株)）

- b 9110規格「航空分野の整備組織に対する要求事項」およびMRO（Maintenance Repair and Overhaul）
（報告者：佐藤幸喜 日本航空宇宙工業会）

今回はJAQGから1名参加し、全体では7名が現地参加、2名がオンライン参加であった。

まず、3つのIA9100シリーズ規格の部分改正版の同時発行に向けて進捗を図っていたところ、ISO9001の全面改正版が2026年9月から11月に発出される予定と明らかになったことを踏まえ、部分改正を中止してIA9100全面改正案を基にIA9110全面改正案を速やかに仕上げることにした。この際、IA9120全面改正案との連携を密に図ることも確認された。

次に、AIMM（Aerospace Improvement Maturity Model:9100成熟度モデル）Overlay活動（9100全面改正に連動した改訂：下図参照）について、9110及び9120の二つのチームともに現在のAIMM2.0バージョンにIA9100全面改正版モジュールを組み込んで準備整次第、活用していくことになった。



続いてIA9110 全面改正版の検討を開始し、次期ISO 9001改訂に含まれる可能性が大きい内容を考慮して詳細検討を進めた。この詳細検討は、今後も定期的にオンライン会議で継続し、10月のIAQG会議で最終確認を行うこととなった。

さらに、今回、IHI山本氏からメールで寄せられた「EASA警告3月26日付『Theft of Turbofan Engine

Parts before Mutilation』』についてチーム内で共有した。これは、9110と9120でのみ不正品(unapproved parts)を定義しており、9100にはないため、山本氏から盗品は不正品であるとの認識について確認を提案され、実施したものである。参考リンク先を下記に示す。

<https://www.easa.europa.eu/en/domains/aircraft-products/suspected-unapproved-parts/theft-turbofan-engine-parts-mutilation>

(リンク先概要)

1月下旬に、スペインで廃棄処理予定のエンジン部品(CFM56、PW1100G-JM、V2500、RB211)を詰めたコンテナ12個(内3個にCritical PartsやLife limited Partsが積まれていた)が、廃棄処理先へ向かう経路を変更されて盗まれた、との報告がスペイン航空局からEASA(European Union Aviation Safety Agency)にあった。EASAは盗まれたPartsやComponentが市場に出回る恐れがあると警告している。

それらはUnapproved Partsとみなされた。盗まれた品物リストによれば全部で625アイテム。

前回のワシントンDC会議で設置されたIAQGのMROリーダーも、本9110Writing Teamに加わり、今回はオンライン参加により別途オンライン会議を設定し、米州、欧州及び亜州の各セクター参加者とそれぞれのMROに関する懸案事項等に関する意見交換を実施しました。本オンライン会議には、IHI山本氏も参加し、意見を述べた。

MROリーダーから今後も9110規格の適用推進や9110規格の内容充実を進めていくとの発言があり、MRO品質向上のための規格検討に加え体制整備にも配慮するとのことであった。



9110 Writing Team

佐藤(右から2番目: 日本航空宇宙工業会) 左右の写真はオンライン参加者

c 9101規格「QMS—航空、宇宙及び防衛分野の組織に対する審査要求事項」

(報告者: 星野光賢 川崎重工業㈱)

9101チームの会議は、対面closedのみで3日間行われ、認証機関を含む10名のメンバーが参加した。

本会議では、9101チーム活動を中心に監査の有効性向上およびOASISデータ活用に関する実務的な議論

が行われた。

会議前アンケート結果を基に、近年の航空宇宙監査が本来期待される付加価値を十分に提供できていない要因について分析した。共通する課題として、監査が条項・文書確認に偏重し、プロセスの有効性、リスク、製品安全、現場実態の把握が不十分になっている点が挙げられた。

経験豊富な監査員ほど形式要求への負担を感じ、経験の浅い監査員は判断回避のため網羅記載に集中する傾向があり、結果として改善につながりにくい監査となっていることが確認された。

背景要因として、3年サイクルで全条項を必ずカバーする制度設計、チェックリスト中心の評価、CB/ABレビューでの条文適合重視、監査時間制約などが整理され、9101およびPBS/RP（パフォーマンスに基づくサーバランス/再認証プロセス）が意図する「有効性・リスク・成果を重視した監査」と実態との乖離が明確化された。地域別の文化的傾向についても共有され、IAQG Asia-Pacificでは規格要求外しを避ける重複チェック傾向がある点を補足説明した。

また、OASISデータを用いた監査結果および不適合（NCR：Non-Conformance Record）分析では、過去12か月データから条項別・地域別傾向は把握可能である一方、サンプル数の偏り、入力漏れ、運用差といったデータ品質問題が分析結果に大きく影響していることが確認された。

全体として、監査を形式重視からリスクベース・プロセス重視へ転換し、OASISを含むデータ活用を通じて監査の実効性と業界への価値提供を高めていく方向性が改めて確認された。

（6）SCMH（Supply Chain Management Handbook）Risk Management（Safety focus）

（報告者：佐藤幸喜 日本航空宇宙工業会）

IAQGから1名が参加した。SCMH 7.3 Risk Managementが5年周期の見直しのタイミングで、現在航空宇宙防衛産業全体で進めているProduct Safety（製品安全）のリスクマネジメントを補強する活動となる。

SCMH 7.22 SMS（Safety Management System）のWriting Teamと、SCMH 7.3 Risk ManagementのWriting Teamの合同活動である。なお、SCMH SMSチームは製品安全のモジュールを作成して、AIMMチームへ提供済みである。

前回のワシントンDC会議において、SCMH7.3に新たに2つの項目、7.3.3 OPERATIONAL RISK MANAGEMENT（ORM）及び7.3.4 Safety Risk Management（SRM）を立てることを決定し、骨格を概成、以降の定期的なオンライン会議でそれぞれの充実を図った。

今回の会議では、まず7.3.2 Risk Based Thinkingから着手し、順次7.3.3から7.3.4へと記載内容等の確認を開始した。

討議の中で、改めて現在のリスクマネジメントはビジネス視点での品質指標（納期、提供する製品・サービスの出来具合）になっているところ、安全リスクをどう取り扱うかを明確に示すSCMH文書を作る必要がある、という前回の振り返りが行われ、メンバーの認識を統一した。3日間の確認工程の中で7.3.2及び7.3.4は完成、7.3.3については一部確認が残ったため、引き続き定期的なオンライン会議で確認を行い、計画通りに完成させることとなった。合わせてIHI山本氏からメールで寄せられたチームへのメッセージ（SJAC9068の英訳版）もチームリーダーから紹介され、**一体感を高めた。**

メンバー全員が真摯に様々なリスクについて意見を交わし、SCMHを作り上げようとする意欲にあふれている。こうした中で日本、そしてアジア・太平洋地域の状況も反映できるように引き続き一所懸命に活動して参る所存である。



SCMH Risk Management (Safety focus) チーム
佐藤（最前列右端：日本航空宇宙工業会）



9100 規格におけるリスクマネジメント

（7） 関係強化戦略分科会（国際スペースフォーラム：International Space Forum）

（報告者：松根功忠 三菱重工業㈱）

スペースフォーラムは、9100シリーズ規格への宇宙固有の品質要求の反映と宇宙分野のステークホルダーへの啓発を主たる目的として活動を行っており、JAQG スペースフォーラムは、IAQG Asia-Pacificの代表として本分科会に出席している。

本会議では、宇宙関連企業に加え、主要ステークホルダーである宇宙機関(NASA、ESA、JAXA)等が参加しており、ステークホルダーとの綿密な情報交換の場として、各セクターの活動報告や、国際スペースフォーラムとしての活動方針等、今後の宇宙製品及びサービス保証やスキームに対する提案等の議論が活発に行われた。

IAQG Asia-Pacificからは、アジア太平洋のセクター活動として、ステークホルダーを含めた各国の活動状況共有等に加え、ステークホルダーとの更なる関係強化のためのプロモーション活動として、昨年11月にフィリピンで開催されたAPRSAP-31 (31st Asia-Pacific Regional Space Agency Forum) でのプロモーション結果を報告した。今後もIAQG Asia-Pacificの代表として、セクター内の宇宙業界への啓発を図るとともに活性化を推進し、当該活動をIAQGへ反映出来るよう積極的に参画していく。



国際スペースフォーラム

佐藤氏（三列目右から4人目：JAXA）、松根氏（三列目右から2人目：三菱重工業㈱）、松井氏（松根氏の左隣：IHIエアロスペース㈱）、栗屋氏（佐藤氏の左隣：日本電気㈱）

（8） 認証オーバーサイトチーム(Certificate Oversight Team: COT)

（報告者：小葉正幸 ㈱IHI）

COTは、航空・宇宙・防衛分野の品質マネジメントシステム(AQMS)の認証制度(IAQG認証スキーム)に関する管理・監視等を行っている。今回の会議では、欧州・米州・アジアパシフィック州の3セクター

から業界（主要製造メーカー）、認定機関（AB）、認証機関（CB）の代表者の参加のもと、9104シリーズ規格改正版へのシステム移行やIAQG Authenticationプログラムの状況確認、新たなResolution（規格要求事項を補足するルール）の確認、各セクターからの状況報告、AB/CBからのIAQG認証スキームに関するフィードバック、などが行われた。新たなプログラムであるIAQG Authenticationについては、AQMS審査員の資格証明を今後はIAQGが自ら行っていくプロジェクトに関して主なタイムラインなどが共有された。

（9） 製品およびサプライチェーン改善分科会（PSCI：Product and Supply Chain Improvement）

（報告者：高木雄一 三菱重工業㈱）

本分科会は、製品やサプライチェーン改善のための活動支援を目的とした活動を行っている。その一つがSCMHの作成・維持であり、サプライヤが顧客の期待や組織目標を満たすための取組みについて、具体的な方法や優良事例を文書（ガイドライン）にまとめ提供している。

リスボン会議では新規開発／定期見直し中を行っているSCMHのステータス確認及び課題協議を行った他、SCMH Promotionロードマップ中小企業をターゲットにSCMH認知向上を図り、品質向上ツールとして活用してもらうためのPromotion活動企画について協議を行い、ポッドキャスト、ウェビナー開催、ニューズレターの発信等を通じてPromotion強化する方針を決定した。今後も引き続きSCMHの充実化とユーザー支援を継続していく。

（10） オペレーショナルパフォーマンス（Operational Performance）

（報告者：池崎隆司 ㈱IHI、城福隆司 日本航空宇宙工業会）

オペレーショナルパフォーマンスチームでは、4つの分科会が以下のとおり活動を行った。

Document Governance分科会ではIAQG内のProcedureの発行手続きや用語集などについて整理を行った。

Procedure Performance Measurement分科会では、IAQG内部の各活動に対して、JIS Q 9100の審査でも使用しているプロセス評価マトリックス（SJAC-9101参照）を用いて評価指標であるKPI（Key Performance Indicator）を評価し、評価結果をIAQG内部で公開する案を立案した。本案の試行対象としてSCMHチームおよびICOTチームを選定して各チームへの説明を行い、快諾を得た。今年秋会議にて進捗状況を確認する。

Sector Liaison分科会では、メンバーシップに関するセクター間の齟齬を解消してIAQGレベルのルールに整合させるための方策について議論し、その結果新しいメンバーカテゴリである「Trade Association」（SJACや欧州のCENが該当する）の追加をEC（Executive Committee）に提案することとなった。

Stakeholder Feedback Management分科会では、FAA（連邦航空局）やDCMA（アメリカ国防契約管理局）との意見公開の実施状況や課題について共有された。

IAQGからはDocument Governance、Procedure Performance MeasurementおよびSector Liaisonに参加し積極的に活動を行っている。

（11） Civil Relationship Meeting

主催者都合で会議日程が変更され出席できず。

（12） 関係強化戦略分科会（Defense チーム）

（報告者：岡部健吾 ㈱IHI）

IAQGは、防衛当局との連携を通じてIAQGが制定している9100関連規格およびその第三者認証制度を防衛当局に認知・受容してもらうこと等を目標としている。近年は防衛製品として宇宙関連機器を取扱う機会

が増えてきている経緯もあり、本会議はSpaceチームとDefenseチームの合同で開催され、防衛当局ステークホルダーであるNATO（北大西洋条約機構）やDCMA（Defense Contract Management Agency：米国国防契約管理局）と協働している活動等の状況報告が行われた。

NATOで使用されている品質保証要求文書にはISO 9001及びEN9100規格をベースとして、NATO独自の要求が追加されている文書があり、ISO 9001の次回改訂内容及び時期を踏まえて当該品質保証要求文書の適切な改訂を支援しており、引続きISO 9001及びEN 9100規格がベースとして使用されるとのことであった。

また、DCMAの使用するマニュアルの改訂に際して、DCMA、NASA、FAA及び米国IAQG等が参加する審議会が企業等からの意見を考慮してもらうための働きかけを行っている状況であった。

なお、米国では2026年1月7日付で発簡された大統領令に基づき、前線部隊が使用する防衛機器の調達契約にて、リードタイムの短縮及び最先端技術の早期活用が求められているとの報告があった。この動向を踏まえ、継続的にOn Time Quality及びOn Time Deliveryの達成に向けた品質管理要求等の改善・制定を行う必要性が高まっていると感じる。今後もステークホルダーをサポートしつつ、世界的な防衛関連の品質管理要求に関する動向を把握していく。

（13）コミュニケーション（Communication Team）

（報告者：城福隆司 日本航空宇宙工業会）

チームリーダーの都合により、急遽コミュニケーションチーム会議はキャンセルとなった。今後は月次のオンライン会議で活動を行う。

（14）CB(Certification Body) Town Hall

（報告者：鈴木淳士 ㈱SUBARU）

CB Town Hallは、航空・宇宙・防衛分野の品質マネジメントシステム認証制度を運用する認証機関が互いに情報や問題共有を行うことを目的として定期的に実施されている会合である。今回の会議では、OASISデータベース維持管理会社であるINTACT社からOASIS改修、AI導入準備作業、IAQGデジタル改善計画、IAQG認証オーバーサイトチームから審査員資格証明機関のIAQG移行準備の最新情報についての説明などが行われた。

（15）OASIS (Online Aerospace Supplier Information System) 関連

（報告者：城福隆司 日本航空宇宙工業会）

IAQGの認証システムを支えるIT基盤であるOASIS(Online Aerospace Supplier Information System)に関し、総会において5月のアップデートの説明があったので紹介する。

- レビューアクセスの拡張 – レビューは、監査全体を差し戻すことなく、監査時間や訪問情報を含む監査ワークフローの詳細をより多く閲覧・確認できるようになった。
- 認定機関への自動メール通知 – 認定機関の担当者が、認証機関のアクションに基づいて自動通知を受け取れるようになった。
- 参加者管理の明確化 – 組織参加者と監査チーム参加者が別々のセクションに分離され、管理が容易になった。
- 手動証明書作成の改善 – 認証日が自動的に引き継がれるようになり、情報の欠落を防ぐため監査オーダーフィールドが必須項目となった。
- エディタの標準化 – コメント欄の書式がより統一され、手動調整の手間が軽減された。
- プロセス削除時の警告 – 関連するチェックリストまたは NCR データが存在するプロセスの誤削除を防ぐため、新たに警告画面と確認画面が追加された。

- マルチサイトアクセス管理 – 権限を持つユーザーがエンティティへのアクセスをより簡単に管理できるようになり、データ共有の制御とセキュリティも強化された。
- Search & Track – 現在の認証結果がより正確に表示されるようになり、OASIS インサイトレポートが見つけやすくなるとともに、より多くのユーザーが一箇所からアクセスできるようになった。
- フィードバックの使いやすさと検索の修正 – フィードバックチケットの選択、大量検索結果のページネーション、過去の検索エラー、チケット開封時の問題に対応した。
- その他の修正および改善 – Manage & Audit のグリッド・チェックボックスの問題、Search & Track の大量検索時のページネーションおよび検索結果(過去・現在情報)の表示などを修正。

4. おわりに

今回の開催地となったポルトガルの首都であるリスボンは大航海時代の雰囲気を感じさせる歴史的景観を残した街であると同時に、坂の街である。会場となったホテルは最寄り空港（ウンベルト・デルガード国際空港）からタクシーで 30 分ほどの高台に立地している。写真を見て頂ければ川からかなり高い位置にあることがお分かりになるかと思う。ホテルから川辺に出るまでの道の傾斜もなかなかのものであった。リスボンの道はカルサーダ・ポルトゲーザと言う、白と黒の石灰岩を職人が手作業で敷き詰めるモザイク石畳であり、見た目は美しいが実際はかなり凸凹しており、歩きにくかった。

一部の会議は川辺のホテルで開催されていたが、参加者の移動が大変だったようである。



会議室からの景色 と 石畳（カルサーダ・ポルトゲーザ）

会議開催中のリスボンは天候も良く、暑くも寒くもなく快適で、参加者もリラックスした様子で、いつものように小委員会が各所で開催され活発な議論が交わされた。

先に述べた通り IAQG は専任の職員はおらず、各委員会のリーダーはボランティアで活動を行っている。各所属会社での通常業務と並行して本会議の準備を行い、議論をリードする必要があるため、中々大変だと思われる。特に規格作成チームのリーダーは経験も要求されるため、そもそも候補者が少なく、これは IAQG の悩みの一つである。

会議の内容は既に述べた通りであるが、ISO9001 の改定スケジュールが目前となっており、これをベースとする IA9100 も遅れずに 2027 年 1 月には改定版を発行する必要がある。現在 IAQG では、9100 の改定、Single-SDO(規格発行を全世界的に同一タイミングで実施)、規格の Digital 化、IAQG による Authentication (AQMS 審査員の資格証明を IAQG 自身がコントロールする)、メンバー区分の整理など、それぞれに大きなテーマが同時進行しており、特に執行部の負荷は相当なものがある。

IAQG はこれらの活動および執行部にメンバーを派遣しており、IAQG 活動を強く支持している。日本国内

においても IAQG の動きを先取りし、日本国内への情報発信についても積極的に行う所存である。

〔(一社)日本航空宇宙工業会 航空宇宙品質センター 事務局 部長 城福 隆司〕